| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 齋藤　渉（さいとう　しょう） |
| 学位(専攻分野) | 博士（人間・環境学） |
| 学位記番号 | 人　博　第　20　号 |
| 学位授与の日付 | 平成9年3月24日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 研究科・専攻 | 人間・環境学研究科人間・環境学専攻 |
| 学位論文題目 | W. v. フンボルトの言語論における言語と有機体の類比性について |
| 論文調査委員 | （主　査）教授 小川　侃　　教授 安井邦夫　　助教授 冨田恭彦 |


## 論文内容の要旨

「W. v. フンボルトの言語論における言語と有機体の類比性について」と題される本博士学位請求論文は，4章から成立している。第1章：序論では，「ドイツ観念論の時代に成立した彼の言語論が，言語を精神の制作物と見なす発想に立ちながら，そのような発想に少なからぬ変動をもたらしている」という，本論文の基本的テーゼが提示された。第2章：フンボルト言語論の基本構造では，フンボルトが最晩年に書いたいわゆる『カヴィ語序説』を中心に，彼の言語研究に繰り返し現われるいくつかの概念を考察し，彼の言語研究は，経験的・歴史的研究という性格にもかかわらず，経験に直接与えられた（外的・質料的な）ものを超えた（内的・形式的な）次元に関わっているという結論を得た。この次元に深く関連するものとして，申請者は，有機体の概念に注目し，この概念が言語類型論というフンボルトの基本構想と大きく関わっていることを示した。第3章：言語＝有機体論の歴史的背景では，言語を有機体と類比的なものと捉えるフンボルトの態度がどのような歴史的背景をもち，どのような思想史的意義をもつのかを解明するため，彼の言語論を18世紀後半の言語起源論争と関連づけて，この論争を背後で動かす「言語を制作するのは誰か」という問いの解明に焦点を絞った。ヘルダーの『言語起源論』と，ハーマンがそれに対して行った批判は，言語の制作主体としての起源が，もはや超自然的な主体（神）にも自然内の主体（人間および動物の魂）にも求められぬという帰結をもたらした。この問題状況は『判断力批判』においてカントが直面していた問題と平行している。同書の「目的論的判断力の批判」が扱うのは，自らの起源を神にも人間にももたないような自然物，すなわち有機的生命の問題であったからである。カントの与えた解答は有機体が自己自身を制作するかのように見なすというものであった。彼の言う自然目的もまた，経験に直接与えられたものを超えた次元に関わるものである。フンボルトの言語＝有機体論は，言語起源論争と有機体論という二つの問題系列を受け継ぐものであり，言語が言語自身を制作するかのように見なすという考察態度の表明だといえる。これは経験的・歴史的言語研究が経験を超えた次元と関係するという第2章の考察と合致することになった。第4章：理論的考察では，すでに見た〈直接的所与とそれを超えるも

の〉という構造を現象学における地平性の概念を援用して自立的で独自の理論的考察を行った。まず，言語的な意味事象に関する理論の枠組みを準備した上で，フンボルトの言語論に立ち返り，そこに見られる問題を現象学的地平概念と関係づけた。フッサールが地平概念を内部地平と外部地平とに区別した際に彼の地平概念が空間的なモデルに囚われているのを批判しつつ，申請者は，それを機能的に把握し直した。そのうえで，この区別を機軸に据えて言語的意味事象の内部地平を考察した。地平は事象の統一を前提とするが，言語的意味事象の統一の核となる意味という契機が間主観的次元において，どのような条件のもとで妥当となるかを明らかにした。意味の間主観的妥当の問題は，言語的意味事象の外部地平との関連で引き続き考察された。外部地平において言語的意味事象は自らの他者と関わるが，それはほとんどの場合意味を理解する主観が自らの他者と関わる場面でもあった。以上の考察は，フンボルトでも大きい問題であった言語変遷の問題を解明する手がかりを与える。言語の通時的変遷の機構が分析可能ならば，言語構造の共時的差異も同様の機構によって原理的には説明可能なはずである。フンボルトにおいては差異の問題が変遷の問題に対し基本的に優位にあったが，これに対し，変遷の問題を差異の問題よりも基底的なものと見なす立場がありえよう。言語の生成根拠をめぐるフンボルトの一見矛盾した発言は，二つの立場の方向性の違いに対応すると同時に言語を精神の制作物と見なすパラダイムに内在する緊張関係にも対応しているといえよう。

## 論文審査の結果の要旨

W. v. フンボルトの言語思想が，青年文法学派などを代表とする19世紀後半の言語学と，青年文法学派から出てそれを徹底的に批判した構造言語学のソシュールや，ヤコブソンなどの20世紀の言語学に大きな影響を与えたことはよく知られているが，しかし，彼の言語思想の詳しい検討は，とくにわが国においては最近においてようやく始まったといえる。ドイツにおける研究状況を鑑みても，いわゆるアカデミー版の全集においてさえ『カヴィ語序説』の全文は出版されていない。しかも，日本では泉井久之助等をはじめとする少数のフンボルティアンを除いて，フンボルトの言語思想のもつ哲学的な意味を解明することは前人未踏の分野といってよい。日本でも1984年になって，亀山健吉氏の『カヴィ語序説』の前述・アカデミー版の日本語全訳が出版されて，フンボルト研究が盛んになりつつある。

以上に述べたフンボルト研究の状況に鑑みて，申請者の本論文は，つぎのような画期的な点をもつ。第一に，フンボルトを中心とした良き意味での文献学的研究に基礎をおきながら，その基礎の上に哲学的解釈を進めていること。第二に，フンボルトに内在的に論を進めながら，他方で当時のドイツの他の思想家（ハーマン，カント，ヘルダー）との関係で歴史的にフンボルトの言語思想を解明しているということ。第三に，現象学の地平性概念を巧みな仕方で機能的にいわば換骨奪胎して，フンボルトの言語思想を言語という意味事象の体系的な解明に資したということ。要するに，この論文は歴史的にかつ体系的にフンボルトの言語思想をとりわけ言語と有機体の類比性に焦点を絞って解明したものといえる。

申請者の本論文は，全部で４章から成立している。第１章は，序論であり，論文全体の構成と文献的でかつ資料的な基礎について日本のみならずドイツにおける現在の研究状況を明らかにした。第２章では，フンボルトの言語論の基礎構造を明らかにするのに，とりわけ民族・言語・精神，内的／外的，形式／資

料などというフンボルト言語学の基礎構造を取り上げて徹底的に明らかにした。とくに圧巻と思われるのは有機体と言語類型論との関係を解明した2章の2節である。言語は部分に対する全体の優位という原則によって成立していて，言語は一種のゲシュタルトのような「部分を統禦する全体性」なのである。言語は人類全体の作品であり，言語はなによりも精神的なものである。さらに，言語が民族の精神的な力と言語の相互作用との間で成立すること，また，人間の言語がなぜ現存のように多くの差異をはらむのか，つまり，言語はなぜ相互に異なるのかというフンボルトの問題を明らかにしている。フンボルトは，古代ギリシャ語とサンスクリット語とをもっとも完成した言語とみなしており，それらの完成された言語からどのようにして諸言語が差異化したかについて，フンボルトが研究と解明の必要に駆られたということは，良く明らかにされている。それは，フンボルトを究極的には言語有機体説と言うべきものに導き，言語は生物のように自律的なものであり，変化し，成長するという思想に導く。ここからフンボルトは言語を歴史的に，つまり通時的な言語の差異化を研究することになる。第3章では，言語＝有機体論の歴史的背景としてヘルダーやハーマンの言語の起源に関する問題が扱われ，さらにカントの有機体の概念が解明されており，フンボルトがカントから大きな影響を受けていることが示唆されている。そして，言語の起源は，神，人間の魂，精神（民族精神，人類精神）に求められるのではなく，むしろ自立的な独立の生物（有機体）のように変化し成長する言語自身に求められるべきだと主張されている。言語は，自律性をもつ。

とりわけ興味ぶかいのは，言語が意味事象として扱われそれを現象学的な地平性概念によって解明した第4章である。空間的なモデルに依拠しているという批判をフッサールの地平概念に投げかけておいて，申請者は，言語を意味事象として捉え，意味事象としての言語の内部／外部地平の分析を行う。これは一見冒険に見えるが，申請者は，フッサール現象学の地平概念についての確実な知識をもって論じているので，成功したオリジナルな分析と思われる。結局，言語はどこまでも多義的なものでありながら，しかも，日常の言語使用において言語が十分に機能しているのは，ひとが言語の多義性を一義化して，異なった他の解釈可能性を排除しうるからであり，言語の理解の規則を実践的に身につけてきたからに他ならない。これを申請者は，実践的な解決としている。最後に，言語の差異とその変遷の問題が論じられている。それは，言語が共時的には様々な差異を示しながら，歴史的につまり通時的に変化して行くという言語の本質を「言語のなかに意味は存在しないが認識されうる」というテーゼにまとめている。

フンボルトの言語思想の哲学的本質をその内在的理解から出発して現代の言語理論の問題にまで及ぶ解明はこれまで十分になされてこなかった。そのなかで，フンボルトやヘルダーなどのテキストと多くの研究文献を読みこなし，申請者はフンボルトを中心としたドイツ言語思想史を辿りながら，現象学的ともいいうる言語哲学へのひとつの可能な道を切り開いたといえよう。申請者に望みたいことは，これからは，この論文において欠けている論点である，フンボルトの言語論の現代の言語学や言語哲学への影響の解明である。申請者のますますの精進を希望する。

よって，本論文は，博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成9年1月29日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。